

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 5 日現在

機関番号：64401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370122

研究課題名(和文) 現代インドにおける染織技術の戦略的継承法に関する民族芸術学的研究

研究課題名(英文) An Ethno-artistic Study of Textile Techniques and Their Transmission in Contemporary India

研究代表者

上羽 陽子 (UEBA, Yoko)

国立民族学博物館・人類文明誌研究部・准教授

研究者番号：10510406

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、現代の手工芸文化において、伝統的技術がどのように継承され、現代的要素がいかに組み込まれているかを解明することを目的とし、インド、グジャラート州にて女神儀礼用染色布を事例に民族芸術学的視点で現地調査を行い、その製作・販売の実態を記録した。生産者は、ローカル向けには作業の省力化や一貫製作・大量生産を目指し、伝統的技術を放棄し、日々開発が進む新たな染料・顔料を多用して改良を進めている。一方、観光客向けには外部者の染色技術を引用し、伝統性を主張し、自らの技術として取り込み、消費者の価値志向に応じて戦略的に製作技術を使い分けている動向を指摘した。

研究成果の概要(英文)：The research reported here attempts to clarify how traditional skills are transmitted and contemporary elements are incorporated in contemporary handicrafts. It examines the case of dyed and printed cloths for goddess rituals produced in Gujarat State in India, using field research from an ethnological perspective to gather data on the production and sale of these textiles. This research reveals clear differences in production and marketing strategies. Producers catering to local markets discard traditional techniques and aim at less labor-intensive, high-volume production of products with consistent quality. They are continuously making improvements, making extensive use of the new dyes and pigments constantly being developed. In contrast, those who target tourists draw upon outsiders' dyeing techniques, assert their traditional nature, and incorporate them as their own techniques, choosing the production techniques to use in strategic response to their customers' price preferences.

研究分野：芸術学

キーワード：民族芸術学 手工芸研究 染織研究

1. 研究開始当初の背景

現在、世界中で染織、陶芸、金工、木工といった手仕事の近代化が進み、急速な工業製品の流入やグローバル化によって、手工芸文化をとりまく世界が急激に様相を変えている。20世紀以降、染織文化においても、工業化が進むにつれ、工業製糸や工業製織布、化学染料による染織品が氾濫し、多くの手仕事が喪失、あるいは喪失の危機に瀕している。古来より伝統的形態を保持し続け、染織技術のメッカともいえるインドにおいても、経済自由化の影響から1991年以降、手仕事の形態が急速に変化している。

研究代表者はこれまで、インドのグジャラート州を主な調査地として、染織品の製作技術や用途、通過儀礼や宗教儀礼における布の役割について調査・分析をおこなってきた〔上羽2006〕。そうしたなかで気づかされたのは、手工芸文化について製作者側に焦点を当てた研究はあまり進んでいないことである。1990年代後半になって、非西洋の造形物をアートや美から切り離して、モノそのものを研究しようとする物質文化研究が始まるが、製作技術の詳細な行程や、ものづくりに一番必要とされる「勘どころ」、製作技術の継承法についてはわずかに触れられる程度である。本研究は、手工芸品の素材、製作技術、道具の作成法、在来知識などを含めた民族芸術学的考察を行い、手工芸文化における伝統的技術の戦略的継承法の特質を浮き彫りにする。なお、研究代表者がめざす民族芸術学のアプローチとは、作り手の視点に立って、技術誌・民族誌的に製作過程を把握することである。調査対象が造作を行う際に、どこに焦点をあて、何を良しとして製作し続けているか、また商人や消費者がどこに魅力を感じながら手工芸品を扱っているかといった点に特に注目するものである。

2. 研究の目的

本研究は、現在の手工芸文化において、伝統的技術がどのように継承され、現代的要素がいかに組み込まれているか、現代インドをフィールドとして解明することを目的とする。インドにおいては、経済自由化が進められた1991年以降、手工芸文化の形態が多元的で複雑な様相をおびるに至っている。本研究では、理論的には染織技術の戦略的継承法、宗教儀礼における布の役割、事例としては、女神儀礼用染色布の生産現場、宗教儀礼での使用状況、インド国内外の観光客との相関関係に関する研究を念頭に置きつつ、民族誌的記述分析を通じて、手工芸文化に関する民族芸術学的考察を行う。

本研究が対象とする女神儀礼用染色布は、絵語りの女神やヒンドゥー神話が染色技術によって描かれた寺院用布である。この布は、かつて不可触民とみなされ、ヒンドゥー寺院に立ち入ることが許されなかった下層グループの人びとが屋外で女神儀礼を執り

行う際に、聖なる空間を仕切るための布として重要役割を担ってきた。インド各地においてさまざまな形態の寺院用布が作られているが、その多くはローカルな文脈において使用されることが少なく、主にインド国内外の観光客向けとして販売されている。本研究では現在でも儀礼用に製作をし続けている、インド西部グジャラート州に点在する染色工房において、生産技術、生産組織、用途、図像、販売先などの基礎的データの精査から着手し、グローバル・ネットワークの進展の下で、製作技術や販売戦略がどのように変化してきたかを明らかにする。

3. 研究の方法

本研究は、染色現場での参与観察と聞き取りを統合して行う。染色現場に長期滞在しての民族誌的記述をもとにした手工芸研究および染織研究の枠で議論した研究は限られている。そこで、本研究は、世界規模で消滅の危機に瀕している染織技術に関して、かろうじて伝統的技術を継承し続け、染織品が通過儀礼や宗教儀礼において、いまだ重要な役割を持っている現代インドでの長期滞在を軸にした参与観察調査と聞き取りを幅広く行うことで、その実態を解明する。

4. 研究成果

本研究は、現在の手工芸文化において、伝統的技術がどのように継承され、現代的要素がいかに組み込まれているか、現代インドをフィールドとして解明した。特に事例としてインド西部グジャラート州アーメダバードで製作される女神儀礼用染色布(マターニ-パチエーディ)をとりあげた。この布は、同州のヒンドゥー教の下層カーストが女神儀礼を執り行う際に、聖なる空間を区切るための間仕切りや天蓋として使用されてきた。製作者は、画家や描く人を意味するチッタラと自称し、他者からはワグリと呼ばれる人びとである。彼らが製作するローカルな人びとが儀礼用として使用する儀礼用布と、観光客などへの販売を目的とした儀礼的役割を担わない観賞用布との比較をおこなった。

ローカル向けの女神儀礼用染色布の製作技術は、大量消費を目的として、シルクスクリンをもちいた化学染料による捺染である。儀礼布はナヴァラートリと呼ばれる1年に2回ある女神儀礼で使用される。製作者は、中都市のローカルマーケットの小売商などへ儀礼布を販売する。儀礼布は使用后、川に流されるため、毎年、新しいものが必要となり、大量に消費される。また、使用者たちが直接、生産地を訪れて儀礼布を購入することもある。このとき、同行する女神儀礼の司祭者が中心となって、工房の在庫から父系外婚集団ごとに決まった女神の図像を見比べる。かれらは日常生活にて女神へ子宝・治癒祈願などをおこなっており、儀礼の最大の目的は女神の力にあやかることである。そのため購

入者は、儀礼布を選ぶ際、女神の表情など画像表現への強いこだわりをもっている。一方、かれらが、製作技術や染料・顔料の素材に関して興味を示すことはない。

一方、観賞用としての女神儀礼用染色布は、ローカルの儀礼用布とは区別をして製作され、画像が細かく多色なことが特徴である。販売先は国内外の手工芸祭や、ギャラリーからの依頼、工房を訪れる観光客などである。

このような販路を確立した経緯には、チッタラの1人が1971年にインド政府のナショナル・アワードに選ばれたことが起因となっている。表彰者は、さまざまな手工芸祭に招待されるとともに、名前が公表されるため、商人をはじめギャラリーなど多方面から仕事の依頼を受ける機会が増える。観光客が生産地の工房を訪れることもあり、その際に注目すべきは、製作者チッタラの語りである。チッタラはヒンドゥー教の神話とともに女神の名前や、ローカルな人びとと女神信仰との密接な関わりについて詳細に繰り返し説明をする。染色布に興味があり、購入したいという意欲がある訪問者の購買意欲をかきたてているのだ。さらに、ここで重要なことは、グローバル市場において、この布の商品価値に、製作技術が含まれていることである。チッタラは販売時に、この布が手描きであることや天然染色であることを強調し、それがわたしたちの伝統であると連呼する。

このような異なる製作技術の要因を1960年代から1980年代の製作技術と比較をし、考察を行った。

1960年代から1980年代の製作技術は、現在の観賞用布の製作技術とほぼ同じである。ただし、当時は水洗や下染め、媒染染色など工程ごとに専門とする職能集団へ発注し、分業によって製作がおこなわれていた。そのため、当時のチッタラ作業は、布に鉄漿と明礬の媒染剤を置くのみであった。一方、現在のチッタラによるグローバル向けの製作技術は、職能集団に発注していた分業による作業工程を、一貫作業としてみずからでおこない、さらに、多色染色を加えているのである。

一貫作業となった理由は、化学染料の普及にある。当時は、化学染料の転換期であり、アリザリンの媒染染色に変わり、木綿素材に堅牢で、低温による浸染が可能なナフトール染料や、安価で作業の容易なプロシオン染料による捺染が主流となっていった。アリザリンの媒染染色は、高温煮沸による浸染のため、作業者の労働負荷が高かった。チッタラは、労働負荷の軽い新たな化学染料を、自らの染色技術に取り入れることで、女神儀礼用染色布を大量生産することが可能になったと推察できる。そして、そこにローカルな使用者が好む極彩色による画像表現をアクリル顔料などで彩色するようになったのである。

その一方で、チッタラは、以前は職能集団へ発注していた製作技術を、自らで一貫作業をおこなうようになった。そして、販路を開

拓したグローバル市場向けとして、一品ずつ少量生産するようになった。この時にザクロの皮やウコンの根などをもちいた天然染料による多色染色を製作技術に加えることで、自ら製作技術を天然染色によるものとして付加価値をつけているのである。

グローバル市場向けの製作技術の特徴は、媒染剤と染料を結合させる媒染染色の技術をもちいていることで、媒染には鉄漿と明礬、染料にはアントラキノン系化学染料アリザリンが使用されている。下染めや印捺のために粘度を高める助剤などには天然物を使用しているが、染色の要となる染料は化学染料をもちいており、販売時に強調していたような天然染色を実際にはおこなっていないのである。

儀礼用布の製作には、日々開発が進む染料や顔料を多用して、作業の省力化や一貫製作・大量生産を目指し、製作技術を改良し続けている。そのため、1960年代から1980年代の染色技術は全く継承されていない。一方、観賞用布の製作技術は、分業によって製作されてきた職能集団の工程に天然染色を加え、自らの製作技術として伝統性を主張している。儀礼用としてもちいられていない染色布を、ローカルな文脈で儀礼的機能が喪失していない女神儀礼用染色布とセットにして、観賞用布としての価値を保つ戦略を選択していると結論づけた。

以上の研究成果はカナダのオタワで開催された「IUAES2017」(会場：オタワ大学)において、「Fashionable tradition: innovation and continuity in the production and consumption of handmade textiles and crafts」のパネルにて、「Strategic Production in Response to Value Orientations: Dyed and Printed Textiles for Goddess Rituals in Gujarat State, Western India」、また、『第59回意匠学会大会』(会場：秋田にぎわい交流館)にて、「染織技術の戦略的継承法 インド、グジャラート州の女神儀礼用染色布を事例に」のタイトルで研究発表をおこない、本研究課題に関連する研究者との情報交換や意見交換をおこなった。これらの研究成果については平成30年度に英語論文として報告予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

上羽陽子「『見方』を開発 インドの染織資料が見えてくる」『学校と博物館でつくる国際理解教育のワークショップ』(国立民族学博物館調査報告(SER)138号) 国立民族学博物館、pp.69-76、(査読あり) 2016年
上羽陽子「身体的に自覚すること 自己と他者の理解に向けて」『学校と博物館でつ

くる国際理解教育のワークショップ』(国立民族学博物館調査報告(SER)138号)国立民族学博物館、pp.112-113、(査読あり)2016年

〔学会発表〕(計9件)

上羽陽子「染織技術の戦略的継承法 インド、グジャラート州の女神儀礼用染色布を事例に」、『第59回意匠学会大会』、主催：意匠学会、於：秋田にぎわい交流館、2017年8月9日

UEBA Yoko "Strategic Production in Response to Value Orientations: Dyed and Printed Textiles for Goddess Rituals in Gujarat State, Western India", IUAES 2017, Ottawa University, Canada, 2017年5月6日

上羽陽子「ラバーリーの刺繍と衣装 意匠からみる他者利用」、『MINDAS 第4回合同研究会』於：国立民族学博物館第4セミナー室、2017年2月4日

上羽陽子「物質文化展示の新たな可能性について 国立民族学博物館南アジア展示場を事例に」、『第58回意匠学会大会』於：京都精華大学(パネル発表)、2016年7月31日

上羽陽子「アッサム州とグジャラート州カッチのラバーリーのラック染め」、『第一回ラック勉強会「2016年1-2月のインドのラック生産と利用」』、主催：ラック研究会、於：京都府立大学合同講義室棟2F第6会議室、2016年5月14日

上羽陽子「他者表象に便乗しないという選択 インド西部のラバーリーを事例に」、『国立民族学博物館共同研究会『表象のポリテクス グローバル世界における先住民・少数民族を焦点に』(代表：窪田幸子) 於：国立民族学博物館第6セミナー室、2016年1月30日

UEBA Yoko "Embodied Knowledge in Rabari Embroidery Patterns." Knowledge Transfer Across Borders: Integrative Approaches, A German-Japanese Colloquium, University of Göttingen, German, (招待発表) 2015年1月15日

上羽陽子「刺繍は手芸か工芸か? 手仕事をめぐる他者の視点」、『現代「手芸」文化に関する研究』、『第4回共同研究会』、於：国立民族学博物館第1演習室、2015年7月18日

上羽陽子「家畜糞の染色利用について インド西部カッチ県の事例から」、『日本沙漠学会沙漠誌分科会研究会/南アジアの生業(なりわい)研究会第4回研究会「世界の半乾燥地における家畜糞利用」』、主催：砂漠化プロジェクト、日本沙漠学会沙漠誌分科会、於：総合地球環境学研究所、2014年12月13日

〔図書〕(計3件)

上羽陽子、中牧弘允、中山京子、藤原孝章、森茂岳雄共編『学校と博物館でつくる国際理解教育のワークショップ』(国立民族学博物

館調査報告(SER)138号)国立民族学博物館、(査読あり)2016年、総ページ数282頁

上羽陽子『インド染織の現場 つくり手たちに学ぶ』臨川書店、2015年、総ページ数199頁

上羽陽子「伝統染織」三尾稔・杉本良男(編)『現代インド6 還流する文化と宗教』、pp.214-217、東京大学出版会、(査読なし)2015年、総ページ数348頁

〔その他〕

上羽陽子「線からうまれる造形物」、『国立民族学博物館 展示案内』国立民族学博物館、pp.162-167、2017年

上羽陽子「幼児を守るラバーリー社会のピースワーク」池谷和信(編)『ピース つなぐ かざる みせる』pp.74-75、国立民族学博物館、2017年

上羽陽子「国立民族学博物館の収蔵品 25 染織技術解説パネル 技術から知る南アジア」、『文部科学 教育通信』No.419、p.2、ジアース教育新社、2017年

上羽陽子2017「インド、アッサムの野蚕利用」、主催：京都市立芸術大学、於：京都市立芸術大学、(招待講演)2017年6月7日

上羽陽子2017「インドの染織文化を考える」、『大阪府高齢者大学校 世界の文化に親しむ科』、主催：NPO法人 大阪府高齢者大学校、於：大阪府社会福祉会館、(招待講演)2017年1月27日、2017年2月3日

上羽陽子「余剰からうみだされる造形物 手芸について考える」、『月刊みんぱく(2016年4月)』、pp.18-19、国立民族学博物館、2016年

上羽陽子「技術から知る南アジア」、『月刊みんぱく(2015年6月)』、pp.6-7、国立民族学博物館、2015年

上羽陽子「インド染織の現場 つくり手たちに学ぶ」、『カレッジシアター「地球探求紀行」』、主催：産経新聞社、共催：近鉄文化サロン、スペース9、於：あべのハルカス近鉄本店ウイング館9階「スペース9」(招待講演)2016年4月27日

上羽陽子「染織文化の今」、『月刊みんぱく(2015年6月)』、pp.6-7、国立民族学博物館、2015年

上羽陽子「野蚕の宝庫 インド」、『月刊みんぱく(2015年3月)』、pp.4-5、国立民族学博物館、2015年

上羽陽子「インド染織文化の今」、『カレッジシアター「地球探求紀行」』、主催：産経新聞社、共催：近鉄文化サロン、スペース9、於：あべのハルカス近鉄本店ウイング館9階「スペース9」(招待講演)2015年11月11日

上羽陽子「色と光が放つイメージ」企画展「イメージの力 国立民族学博物館コレクションにさぐる」関連イベント、主催：郡山市立美術館、共催：国立民族学博物館友の会、於：郡山市立美術館多目的スタジオ、(招待

講演) 2015年7月4日

上羽陽子「インド刺繍布がうみだす世界」
『第445回みんぱくゼミナール』、主催：国立民族学博物館、於：国立民族学博物館講堂、2015年6月20日

上羽陽子「インドの衣装と染織文化」神戸大学発達科学部ファッション文化論(2)、於：神戸大学、(招待講演) 2015年6月17日

上羽陽子「現代インド「民族衣装」の魅力
ラバーリーの衣文化から」、主催：NHK文化センター梅田教室、於：梅田阪急ビルオフィスタワー17階、(招待講演) 2015年3月22日

上羽陽子「インド刺繍からみる女性の知恵と工夫」、主催：大阪府男女共同参画推進財団、於：大阪府男女共同参画・青少年センター(ドーンセンター視聴覚スタジオ)(招待講演) 2014年9月27日

アウトリーチ活動 ワークショップ

上羽陽子「光放つ布 インド伝統のミラー刺繍を体験！」特別展『イメージの力 国立民族学博物館コレクションにさぐる』関連ワークショップ、於：石川県立歴史博物館、主催：石川県立歴史博物館、共催：国立民族学博物館友の会、講師：上羽陽子、アシスタント：安達昌代、(依頼あり) 2017年8月5日

上羽陽子「模写実践と異文化理解 インド西部の刺繍布を読みとる」、於：川島テキスタイルスクール、主催：川島テキスタイルスクール、講師：上羽陽子、(依頼あり) 2017年5月9日、6月6日、7月4日

上羽陽子「手織り絨毯の織技術について」、於：クロス・ウェーブ梅田、主催：株式会社絨毯ギャラリー、講師：上羽陽子、(依頼あり) 2017年6月21日

上羽陽子「キラキラ 光の力 インド伝統のミラー刺繍にチャレンジ！」特別展『イメージの力 国立民族学博物館コレクションにさぐる』関連ワークショップ、於：香川県立ミュージアム、主催：香川県立ミュージアム、共催：国立民族学博物館友の会、講師：上羽陽子、アシスタント：安達昌代、(依頼あり) 2016年10月23日

上羽陽子「模写実践と異文化理解 インド西部の刺繍布を読みとる」、於：川島テキスタイルスクール、主催：川島テキスタイルスクール、講師：上羽陽子、(依頼あり) 2016年5月31日、6月14日、6月28日

上羽陽子「手織り絨毯の織技術について」、於：クロス・ウェーブ梅田、主催：株式会社絨毯ギャラリー、講師：上羽陽子、(依頼あり) 2016年6月22日

上羽陽子「インドのキターブチャルカで糸紡ぎ」、於：川島テキスタイルスクール、主催：川島テキスタイルスクール、講師：上羽陽子、(依頼あり) 2015年7月11日

上羽陽子「手織り絨毯の織技術について」

於：クロス・ウェーブ梅田、主催：株式会社絨毯ギャラリー、講師：上羽陽子、(依頼あり) 2015年6月24日

上羽陽子「模写実践と異文化理解 インド西部の刺繍布を読みとる」、於：川島テキスタイルスクール、主催：川島テキスタイルスクール、講師：上羽陽子、(依頼あり) 2015年6月2日、6月9日、6月23日

上羽陽子「インド伝統的刺繍技術入門」、於：大阪藝術学舎(京都造形芸術大学大阪サテライトキャンパス)、主催：京都造形芸術大学・東北芸術工科大学、講師：上羽陽子、(依頼あり) 2014年8月30日、8月31日

上羽陽子「インドのキターブチャルカで糸紡ぎ」、於：川島テキスタイルスクール、主催：川島テキスタイルスクール、講師：上羽陽子、(依頼あり) 2014年7月5日

上羽陽子「模写実践と異文化理解 インド西部の刺繍布を読みとる」、於：川島テキスタイルスクール、主催：川島テキスタイルスクール、講師：上羽陽子、(依頼あり) 3回連続講座：2014年6月3日、6月10日、6月24日

上羽陽子「手織り絨毯の織技術について」『シルクロード絨毯塾』、於：クロス・ウェーブ梅田、主催：株式会社絨毯ギャラリー、講師：上羽陽子、(依頼あり) 2014年6月12日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

上羽 陽子 (UEBA Yoko)

国立民族学博物館・人類文明誌研究部・
准教授

研究者番号：10510406